ドゥルーズはシモンドンの議論をいかに理解し使用したか

――ドゥルーズの忠実さと過剰さ――

近藤和敬

1．導入と概要

ジルベール・シモンドン（1924―1989）の哲学は、メルロ＝ポンティの現象学とカンギレムの科学認識論の影響のなかで形成された彼特有の個体化論と技術論が、ドゥルーズやラトゥールを介して近年のフランス哲学に大きな影響を与えていることで知られている。シモンドンの哲学を科学認識論的な観点から見たなら、特に物理学（宇宙物理、量子物理含む）、機械学、電子工学、サイバネティクス、生命科学、認知科学についての認識論的研究を多く残していることが注目される。特にその文体は極めて認識論的なものであり、科学技術という対象についての（人類学者のギアーツ風に言えば）「厚い記述」のなかに、間欠的に認識論的なメタ分析が挿入され、それらが一体となって著作のなかに織り込まれている。また、彼の主著『形態と情報の概念からみる個体化』（1958年に書かれたとされるシモンドンの国家博士論文。このうちの第一部が1964年に『個体とその物理生物学的発生』としてフランス大学出版局より公刊された。ドゥルーズが参照するのは主にこの版）では、科学の歴史を扱うというよりも、「宇宙発生論」（コスモゴニア）的観点から、[1] 物理的なもの、生物的なもの、心理的なもの、集団的なものが、それぞれの「個体化」を通して順次構成的に発生していく（つまり階層を創発していく）過程が描かれる。[2] 本稿で用いる「宇宙発生論」（的）という語の意味の広がりは、それほど確定的なものではないが、その語が適用される範例としてプラトンの『ティマイオス』の記述を含むようなものとして理解されたい。現代風の言い方と比較すれば、ある意味では英語圏における「自然主義」naturalism という語の使用と重なる部分も少なくない（ただし、それらのあいだの根本的な差異は、「宇宙霊魂」（プシュケー・コスムー）の議論を含むかどうかにあると思われる）。[3]

---

1 シモンドンの個体化論は、ソクラテス以前の自然哲学的な伝統と宇宙発生論的な神話の文脈においてより理解することができるのではないか［廣川1997の付録「自然について」（旧版の二章に相当）を参照。本稿のコスモゴニアという用語もこれによる］。宇宙発生論的と言っても、現代の宇宙形成史のようにビックバン前後から宇宙の膨張と分裂そして熱冷却に始まる過程を描くわけではない。描かれるのは、あくまで存在者の階層的発生の論理的秩序であって、シモンドンはそれを発生の歴史的秩序とは厳密に一致させていない。

2 これに対して『技術的対象の存在様態』［Aubier, 1969］のほうでは、比較的新しい技術的対象（内燃機関、ガソリンエンジン、ディーゼルエンジンなど）の「絶対的起源」という節題のもとに、系譜学的研究がおこなわれている［中村2011］。ただし、その観点は歴史的観点というよりも、正しく系譜学的、系統分類学的発想に基づいている。この点については後述。

3 「宇宙霊魂論」と「コスモゴニア」（＝「コスモロジー」）との関連については藤沢2014を参照されたい。

シモンドンの記述においては、当の過程を統一的に見ることを可能にする「トランスデュクション」「情報」「個体化」「内的共鳴」「準安定性」「ポテンシャル」というメタ的な（記述的な）諸概念は、それらが実際にもちいられることを通して、その記述を読むものの目にそのような認識論的な諸概念として実際に浮かび上がってくる。そのようなシモンドンの記述がもつ科学認識論の文脈における固有性は、この階層創発的な「宇宙発生論」の視点にあると言えるだろう。シモンドンの個体化論における形相‐質料図式への批判の起源（形相‐質料図式は、根本的には形態分類学の発想と結びつき、そこにおいて発生学的、系統学的発想はうまく機能しない）は、この視点にあるのであって、この点を理解しなければ、その批判の意味もなさないことになろう。

それに対して、逆に科学認識論がもっている、学知固有の内的生成の線的あるいは面的な歴史を記述するという側面は、他の科学認識論者（たとえば、カヴァイエス、カンギレム、フーコー、グランジェ、シナスールら）の記述と比べて幾分弱いと言わざるをえない。[4] ただ、「宇宙発生論」的視点と、学知固有の内的生成の視点をどうやって連絡させるのか、という問題意識は、（ブランシュヴィックにおいてはいまだ潜伏的であったが）、次世代のジャン・カヴァイエスやアルベール・ロトマンの記述にはすでに垣間見られる。[5] 特にカヴァイエスの影響を強く受けつつ、またシモンドンに対して指導教員として強い影響を与えたジョルジュ・カンギレムの論文１９６６年の「概念と生命」（『科学史・科学哲学研究』［ヴラン社１９６８年刊］所収）にもそれは比較的はっきりと見られる。[6] したがってその意味では、シモンドンの固有性は、科学認識論の研究文脈に伏してあった問題意識を、一つの方向に明確に分化させたことによって生じたのだとも言えるだろう。

本稿は、シモンドンの哲学それ自体を論じるのではなく、あくまでジル・ドゥルーズによるシモンドン哲学の使用に問題を限定して論じる。それにあたって、まず本稿中頃に付された資料1に、ドゥルーズによるシモンドンへの明示的言及を列挙して配列した。最初にこの資料1から

4『技術的対象の存在様態』においては、技術の系譜学が試みられるが、その視線の先にあるのは、技術に関する学知あるいはその理論的概念の歴史内的な生成過程ではなく、個体としての技術的対象それ自体の発生的系譜学にあり、ひいてはここで論じるように「宇宙発生論的」な視線に導くものであるように見える。これらのあいだの異同は繊細な問題を含むことになるが、ここでは展開しないでおく。

5 カヴァイエスの宇宙発生論的観点については、カヴァイエス２０１３，40―41を参照。ロトマンについては Lautman1947 の『ティマイオス』への言及および Lautman1938 結論におけるイデア論を参照されたい。また、ある意味では文脈が異なるが、アレクサンドル・コイレの『コスモスの崩壊――閉ざされた世界から無限宇宙へ』などの仕事もその文脈でとらえることができる。また、この観点にたいして、フランスにおけるホワイトヘッド哲学の受容が重要な役割を果たしていることも見逃せない。若くして失われたジャン・ニコの業績とジャン・ヴァールによるアメリカ哲学の紹介によって１９３０年代にはフランスでホワイトヘッド哲学はよく知られていた。

6 この論文自体の発表は、１９５８年に書かれたとされるシモンドンの博士論文よりも時間的に後になる。ただし、カンギレムのこの論文で暗示しているように、問題意識そのものはカヴァイエスの「概念の哲学」に由来するものであり、シモンドンがカンギレムに影響を与えたかどうか、という問題を確定することのできる根拠は今のところ見当たらない。

わかることを簡単に述べる。そのうえで、ドゥルーズの論じるシモンドンとシモンドン自身の差異について論じる。最後に、より大きな視点から（特に宇宙発生論的視点から）ドゥルーズとシモンドンの共通性、あるいはドゥルーズがシモンドンを貫いてその外に見ている忠実さと過剰さについて論じる。

2．資料からわかること

1．シモンドンへの言及箇所を類別すると、大きく三つの部分とそれ以外に分けられる。

I．強度的な内的共鳴システム（『個体とその物理生物的発生』20以下：つまり「序論」に相当）

II．質料形相図式批判、煉瓦造り、木のひき割り、冶金術（28―60：つまり第一部第一章[7]「形相と質料」に相当）

III．生体膜、内と外、脳、位相幾何（２６０―２６５：第二部第二章第二節「情報と個体発生」特にそのなかの「5．トポロジーと個体発生」に相当）

IV．それ以外（ホドロジー空間批判、『技術的対象の存在様態』第一部第一章第四節「ある技術系統の絶対的起源」への参照）

2．type I に属するシモンドンの強度的な内的共鳴システムは、『差異と反復』の主題であったが、『意味の論理学』の第15セリー以降、明示的には登場しない。ちなみに、第15セリーでは、『差異と反復』で特異点の理論家として登場するロトマンと並置されているが、「膜」についての言及が付加され、参照箇所も序論ではなくtype III に向けられている（type I の言及先である「序論」には「膜」の議論が存在しないことに注意されたい）。

3．第28セリー以降、type III に属する表面、内部と外部の境界、位相空間、脳という主題が明確にせりあがってくる。これは、『シネマ２』、『哲学とは何か』で重要な主題として再び取り上げられる。しかし、『シネマ２』で同個所の参照はあるが、『哲学とは何か』では脳について論じている箇所など、ありそうな場所は多数あるが実際には参照されていない。

4．表面、内部と外部の境界は、そのまま type II『千のプラトー』における「中間的媒介」の議論につながる。中間的媒介の議論は、シモンドンの質料形相図式批判と関連付けて『千のプラトー』で中心的に論じられる。特に、これが「物質の流れ」、「機械状系統流」、「冶金術」（「マイナーサイエンス」）と関連付けられる点で、『千のプラトー』では『差異と反復』とは異なる仕方で、シモンドンが前景化されている。

5．しかも、シモンドンをフッサールと併記していることも、ドゥルーズがもちいる「超越論的」という語の内実を理解するうえで重要である（『意味の論理学』では暗に、『千のプラトー』では明示的に、『フーコー』でも暗に）。

6．『意味の論理学』第15セリー以前までは特異点の思想家だったシモンドンだが、『千のプラトー』では「此性」としての特異性の理論家という仕方で、復活している。しかし、理論的な問題としては、『千のプラトー』の「此性」と関連付けられた「特異性」の議論が、ど

7 章立ては『形態と情報の概念からみる個体化』に従う。

こまで実質的に『差異と反復』などにおいて論じられた「特異性」（「特異点」）の議論と一致するのかということは別の問題である。

7．鋳造と変調という主題は、type II に属し『千のプラトー』のなかにすでに表れているが、主題的には論じられていない。むしろ『感覚の論理』以降で前景化し、『シネマ1』、『襞』で繰り返し論じられる。

8．時間系列でみれば、「強度的な内的共鳴システム」→「膜あるいは表面」→「脳（大脳新皮質）＝形而上学的表面」→「中間的媒介」→「機械状系統流＝物質の流れ」→「鋳造と変調による対象の連続的規定」と進んでいる。

9．type I で論じられる内的共鳴が生じる「場」milieu と、type II の「中間的媒介」は、シモンドンにとっては同じものである。そしてこれが、生物においては type III で論じられる「膜」あるいは「脳表面」ということになる。

10．その意味では、ドゥルーズの参照は一貫している。しかし、ニュアンスの置き所が、システム論的なところから、内在的なところへと移っている。言いかえれば、原理的なものから、中間的なもの、媒介的なもの、膜、表面的なものへと移行している。この移行は、ドゥルーズが「『意味の論理学』イタリア語版への覚え書き」（『狂人の二つの体制　1975―1982』所収）で書いているドゥルーズ自身の関心の遷移（「高所」と「深層」の対から「表面」への移行）とおおよそ一致している。

3．ドゥルーズとの差異

シモンドンの議論それ自体は、徹底的に階層的であり、その意味では、ドゥルーズの議論よりも分析系科学哲学の議論にある物理主義＋創発的階層の議論のほうにむしろ近いと評価することもできる。[8] 最も基礎的な分子的なものから順に、大きな物体が形成され、生物が形成され、生物集団と心理的なものが形成されていく。その際、常に下位の階層の余剰（これがシモンドンのいう情報の根本である）が異なるスケールをもつ次の階層の組織化を促し（そのとき、下位の階層の余剰は上位階層にとっての問題として現れる）、それが次々と繰り返されていく。したがって、シモンドンの議論それ自体は、万物の生成を論じつくすものとなっている。

しかし、ドゥルーズの議論にとって、この「階層性」（階梯性）échelles と「スケール」ordres de grandeur の存在、より正確には線形的な「階層性」と「スケール」のもつ整列性は極めて不都合である。[9]『差異

8 ただし、それがチャーマーズなどの典型的な物理主義と異なるのは、「情報」概念がすべての個体化をつなぐ軸となっている点である。その意味では、橘［2012］が論じていることは正しく、ベルクソンの「スピリチュアリスム」（霊魂論）を介して、本稿で論じている「宇宙霊魂論」を含む「宇宙発生論」へとつながっていると見るべきかもしれない。この点が物理主義とシモンドンの議論の本性的に相いれない点である。また階層性とスケールの有無は、「宇宙霊魂論」を認めるか否かとは独立である。これの展開である中世の天使論と「階層性」の本性上の結びつきを想起する必要がある。

9 ドゥルーズ自身も、強度的差異のシステムでは、齟齬や、高低差を認めている以上、局所的な階層関係までをも否定しているわけではない。局所的

資料１．ドゥルーズからシモンドンへの言及

type**	D（D&G）の著作	キーワード	cite	シモンドンの参照個所*	引用されたシモンドンの文章
Ⅰ	『差異と反復』1968	個体化するセリー、内的共鳴、	2, not25	20	
Ⅳ		ホドロジー空間に対する批判，　対立ではなく連絡しあう個体化	5, not11	232-234	
Ⅰ		個体化する働き、準安定状態、前個体的状態、ポテンシャルエネルギー、問題的な場	5, not16	なし（20と同じと思われる）	
Ⅲ	『意味の論理学』1969	場のポテンシャル・エネルギー、セリーの内的共鳴、**膜の位相的表面**、**意味（＝方向）の組織化**、問題性の地位	15, not3	**260-264**	「生体は、自己の境界*で、自己の境界の上で生きている生命に特徴的な極性は、膜の水準にある。この場所で、生命は本質的な仕方で動的位相の局面として実在する。この動的位相そのものは、メタ安定性を維持し、それによって生命は実在する。…内部空間の全内容は、位相的には、外部空間の内容と生体の限界で接触している。実際、位相において隔たりはない。内部空間にある生ける物質の集塊は、生体の境界上で活性化して外部世界に現前する。…内部環境の一部をなすという事実は、中にあるというとことだけでなく、境界の内側に向かっているということでもある」
Ⅲ		身体表面、内部と外部	28, not1	263	「内部空間の中身が、外部空間の中味と、生体の境界で位相的に接触する」
Ⅲ		表面、脳、位相空間	31, not3	262	「実際は、投射はユークリッド空間を位相空間へ変換する。だから、ユークリッド的な仕方では皮質を適切に表象することはできない。厳密には、微小領域に対してなら幾何学的意味で投射はあるが、皮質に対しては投射について語るべきではないだろう。そして、ユークリッド空間の位相空間への変換と言うべきだろう」
Ⅱ	『千のプラトー』1980	「質料ー形相」モデル批判、特異性または此性を担った、運動するエネルギー的物質性、特異性や此性はすでに幾何学的というよりはトポロジー的な潜在的形相を暗示する、木のひき割りの例、重要なのは、木に随うことであり、質料に形相を押しつける代わりに、さまざまな操作と木の物質性を連結しながら木そのものに随うこと、中間的媒介的帯域、エネルギー的分子的帯域、フッサールとの並置から機械状系統流＝物質の流れへ、金属的なものと冶金術.	12, 464-466*		「形相と質料のあいだに、中間的媒介的な帯域が存在するということ」
Ⅱ		特異性と力をそなえた質料、すなわちエネルギー的諸条件にもとづく力動的図式	12, not28	42-56	「形相とは、命令する人間が自己の内部まで考えたものであり、命令を実際に与えるときには積極的に表現しなければならないものである。すなわち形相は表現可能なものの次元に属している。」
Ⅳ		技術系統の絶対的起源	12, not84	*41以下	「技術系統の絶対的起源」ディーゼルエンジンや真空管のこと
Ⅱ		**鋳型と変調**、質料形相図式の力は技術的操作に由来するのではなく、技術的操作を従属させる労働の社会的モデルに負う(47-50)	12, not85	**28-50**	「変調することは、連続的に変化するように型取りをすることである」42
Ⅱ		シモンドンの冶金術への礼賛。電子工学の起源としての冶金術。	12, not86	59	「冶金術は質料形相モデルによって完全に思考されるものではない。冶金術の型取りは目に見える形で瞬間的に成就されるのではなく、継起するもろもろの操作の結果である。厳密には型取りと質的な変容とを区別することはできない。鋼の鍛造と焼き入れは、本来の型取りと呼ばれるべきものよりも、前者は以前であり、後者は以後である。しかしながら鍛造と焼き入れは対象を構成するものなのである。」
Ⅱ	『感覚の論理』1981	内在的鋳型、型取りと変調、**鋳型と変調**	14, not18	41-42	「鋳型から取り出す（démouler）に際して停止は決して存在しない。なぜならエネルギー媒体の循環は、永久に鋳型から取り出すことと等価であるからである。移調装置とは時間的に継続する鋳型である……鋳型を作るとは決定的な方法で移調すること、移調するとは継続的で絶えず変化する方法で鋳型を作ることである」
Ⅱ	『シネマ１』1985	鋳型と変調の一般的差異	2, not21	40-42	
Ⅲ	『シネマ2』1986	内部と外部、環境、脳、位相幾何	8, not31	**260-265**	
Ⅲ	『フーコー』1988	内、外、境界、位相幾何、時間	224-225*, not51	258-265	直前にフッサールへの言及在り。フッサール『イデーン』の饗子一擲、点の配置としての意思決定（未確認）。
Ⅱ	『襞』1990	対象の新しい規定は、もはや対象を空間的な型に、つまり形相・質料の関係に結びつけるのではなく、時間的な変調に結びつけるのだが、これは質料を連続変化にみちびくだけでなく、形相の連続的発展をもたらす	35*, not11	41-42	「型から取り出す作業にとって停止は決してありえない。なぜなら、エネルギーの支えの循環は、たえまない型取りに等しいからである。一つの変調器は、時間的な連続的型である。型取ることは決定的な仕方で変調することであるが、変調することは連続的な、たえまなく変化しうる仕方で型取ることである」

* *L'individu et sa genèse physico-biologique*, P.U.F., 1964

*限界[limit]を境界と訳しなおした。以下、境界で統一。

*旧版の邦訳ページ数

* *Du monde d'existence des objets techniques, Aubier,*

**新版の邦訳ページ数

*新版の邦訳ページ数

** 引用個所は、おおよそ20以下、28－60, 260-265の三カ所である。
20以下を**type I**：内的共鳴のシステム
28－60を**type II**：煉瓦、木のひき割り、冶金術
260－265を**type III**：内と外、膜、脳
それ以外を**type IV**
とする。

論文では、「ジルベール・シモンドン　個体とその物理・生物的な発生」1966のみに言及あり。要点は『差異と反復』に同じでtype Ⅰに属する。ここでは省略した。

と反復』で、ドゥルーズは繰り返し、このような線形的な「スケール」と「階層性」のもつ整列性を厳しく批判しているからだ。だから、シモンドンの議論において「階層性」と「スケール」が線形性と整列性をもつという一点だけが、ドゥルーズの議論のうちに取り込まれるときに意図的に退けられている。その作業がなされているのが以下の個所である。

「異質なあるいは齟齬する諸セリーそれ自身を関係＝比の状態に置くような二階の即自的差異、つまり暗き先触れを、わたしたちは齟齬をきたすものと呼ぼう。関係＝比の状態に置かれた差異の相対的な大きさを決定するのは、どの事例においても差異の置き換え空間とその偽装プロセスである。あるいくつかの事例においては（つまりあるいくつかのシステムにおいては）活動状態にある差異の差異は、『きわめて大きく』なる可能性があり、別のシステムでは「きわめて小さく」なるはずだということは、たしかに周知の事実である25。」189（旧版邦訳頁数。一部訳を変更したところがある。）

「齟齬する諸セリーとそれらの内的な共鳴が、システムの構成において重要であるということについては、ジルベール・シモンドン『個体と個体の物理的・生物的発生』p. 20を参照されたい（ただしシモンドンは諸セリー間の類似の要請、あるいはそこで作動する諸差異の小ささの要請が条件となると主張している）。」（第二章原注25，p. 464）

「しかし、後者の事例に、類似を事前に要請することの純粋な表現があるとみなし、この類似は、前者の事例ではただひたすらゆるんで、地球的な規模で広がるのだと考えるなら、それは間違いだろう。たとえば、齟齬するセリーにほぼ似ているという必要性、振動数は隣接している（ωがω0と隣接している）という必要性、要するに差異は小さいという必要性が主張されている。しかし正確には、もろもろの異なるものを連絡の状態におく作用者の同一性を前提する場合、たとえ地球的な規模であっても「小さい」差異など存在しない。小と大は、わたしたちがすでにみたように、《同じ》ものと似ているものとの基準に即して差異を左右する以上、その差異に対しては、到底うまく適用されるものではない。・・・」189（下線による強調は引用者による。）

以上のシモンドンに対するドゥルーズの批判を、ドゥルーズ特有の「プラトニズムの転倒」の観点から読むことができる。「プラトニズムの転倒」といっても、プラトンの全否定ではないことに注意されたい。むしろ後期プラトンが行きつく先、あるいはそれが含み持っていたものとしての「プラトニズムの転倒」をこそドゥルーズは肯定する。同一性、類似性だけで議論が成立することはなく、差異が、つまり〈異〉[10]の類が不

10 レヴィナスとの可能な比較のためには〈他〉と訳したほうが良いかもしれないが、ここではプラトンの著作の翻訳の文脈に従う。

な階層性までも否定してしまっては、ドゥルーズがシモンドンから何も受け継いでいないということになる。むしろドゥルーズによるシモンドン哲学の受容は、局所化され、かつ線形化されえない階層性とスケールにこそあるとも言える。

可欠であり、それによって、「あらぬ」（異―有）があるという議論を展開したのが、後期プラトンの『ソピステス』であり、この「あらぬ」を論じるにあたって、「ある」ものの模倣である「似像」（＝エイコーン）から区別された、「あらぬ」ものの模倣としての「見かけだけの像」（＝パンタスマ）が措定される。ソフィストは、この「見かけだけの像」を「物真似」によって提示する技術をもつものとして、定義される。そして、この「見かけだけの像」こそが、ドゥルーズが「コピー」（＝「似像」）から区別された「シミュラクル」と呼ぶものである。「階層性」は、ドゥルーズが『スピノザと表現の問題』「第11章」や「内在性の浜辺」（『狂人の二つの体制　１９８３―１９９５』所収）で論じているように、[11] 類似性、コピーとモデルの関係によって成立する。これに対して『差異と反復』の論理は、徹底して「シミュラクル」の論理である以上、このような「階層性」をそのまま引き受けることはできない。それゆえ、シモンドンが非常に重視した「スケール」と「階層性」そして、それらがもつ線形性という特徴を、ドゥルーズは徹底して排除したうえで、自身の議論に取り込んでいるのである。

ちなみに、そこで反論の根拠となっている小と大の批判についても、後期プラトンの『テアイテトス』［１５４Ｂ―１５５Ｄ］におけるプラトン自身による批判と同型のものとみなしうる。要するに、基準がなければ、大も小もないが、基準とはそもそも「同一性」に基づくのであり、差異がそうでない以上、大と小を、差異について適用することはできないというものである（プラトン自身による小と大の批判については、［藤澤２０１４：１３０―１５２］を参照されたい）。

このシモンドンの議論からの「スケール」と「階層性」のもつ線形性と整列性の排除という点については、『差異と反復』以降でも維持されており、特に、「リゾーム」と「機械状系統流」とシモンドンの議論との関係が明示的になる『千のプラトー』では、この前提抜きにはシモンドンを参照する議論はまったく理解できない。しかしその一方でシモンドンの立場からすれば、ドゥルーズが言うような「スケール」と「階層性」が線形性と整列性をもつという条件の排除は、シモンドンの議論を本当に無傷なものに残すのか、ということを問い返す必要がある。この点では、ドゥルーズとシモンドンの技術論ないし個体化論は、安易に同一視することができないのである。

４．ドゥルーズの過剰なる忠実さ

ドゥルーズの『千のプラトー』の議論は、マヌエル・デランダが印象的に描きなおしているように［DeLanda2000］、一つの現代的な「宇宙発生論」として読むことができる。ただしそれはあくまで地球生物の進化史の観点にとどまっていると指摘することはできる（これに対してデランダ自身は、宇宙進化史の観点ともそれをはっきり接続させている）。それが『千のプラトー』「12　戦争機械と遊牧論」で展開される「機械状系統流」と「冶金術」の問題である。「宇宙発生論」的な視点を介在させて『千のプラトー』を読むことで理解可能になるのは、シモンドンとドゥルーズが共有する技術論の文脈が、なぜハイデガーのそれ（技術批判のための技術論）と大きく異なるように見えるのか、という点であ

11　この二つの参照はともにモーリス・ドガンディヤックによる新プラトン主義についての業績に関連付けられている。

る。プラトンがかつて論じていたように、宇宙と自然と生物を生み出す神の技術は、人間の技術と類比的（比例論的）に理解されるのであり、すなわち人間の技術は、神の（つまり自然を生み出す自然の）技術の「似像」あるいは「模倣」として理解される。比例論的には、人間的技術は、自然的技術の一部に過ぎない以上、人間的技術は、その根本において自然的技術を前提し、それに従うものでなければならない。シモンドンが描きドゥルーズが参照する「木のひき割り」の例は、まさにその典型であろう。

「たとえば、木のひき割りという操作が木の繊維の波状の変化や歪みといった変化に合わせて行なわれるように。他方では、形相的本質から導かれ物質に実現される本質的諸特性に、あるときは操作の結果として生まれ、あるときは反対に操作を可能にする、強度の可変的情動を付け加えなければならない――たとえば、木材の多孔質の程度や弾性や抵抗力の程度。いずれにせよ、重要なのは、木に随うことであり、質料に形相を押しつける代わりに、さまざまな操作と木の物質性を連結しながら木そのものに随うことである――法則に服従した質料よりもノモスを持つ物質性に、質料に特性を伸しつけうる形相よりもさまざまな情動を構成する表現の物質的特徴にしたがうことである。」（『千のプラトー』邦訳旧版，４６４．）

ドゥルーズはシモンドンの議論から「スケール」と「階層性」が線形性と整列性をもつという条件を取り払いながらも、その冶金術的な側面、つまり自然の技術と人間の技術の連続性を主題化することで、シモンドンの意図とは異なる仕方で、宇宙発生論的な側面を取り出すことに成功している。そして、この宇宙発生論的な議論の文脈こそが、ある意味では、「超越論的哲学」（つまり、超越論的経験論）が解体再構成されるべき場所である、ということが、二度にわたるシモンドンとフッサールの併記によって示されていると考えられる。

「なぜ機械状系統流すなわち物質の流れは本質的に金属的なのか、あるいは冶金術にかかわるものであるのか？　という問いである。ここでもまた、ただ明確に区別された観念だけがこの問いへの答えを与え、移動生活と冶金術のあいだには特別な基本的関係（脱領土化）があることを示しうる。しかしながら、フッサールやシモンドンを引きながらわれわれが援用したもろもろの例は、金属だけでなく木や粘土に関するものであった。さらに、草や水や獣の群れの流れも存在し、それぞれ系統流つまり運動する物質を形成するのではないだろうか？」（同上，４６６）

宇宙発生論的な文脈それ自体を超越論的なものとしてとらえる（ここにドゥルーズの後期哲学を「自然主義」と呼びうる一つの根拠がある）ことで、シモンドンとフッサールをその中で癒合することがドゥルーズの意図であろう。もしそうでないのだとしたら、シモンドンとフッサールの併記は、シモンドンの記述的な（メタ的な）諸概念を、元の意味での超越論的哲学のカテゴリーとしていったん認めなおしたうえで、技術的対象の個体化を現象学的に解釈しなおすということを意味することになるのだろうか。しかし、そのような読みは、シモンドンの意図とも一致しないだけでなく、ドゥルーズの議論ともまったく一致しない。むし

ろ、宇宙発生論として「超越論哲学」つまりドゥルーズの用語で言う「超越論的経験論」を理解するということのほうが、ドゥルーズの意図にそっているのではないか。

ただし、そのように理解された「超越論哲学」つまり「超越論的経験論」にとっての最大の問題になるのは、（ラカンあるいはスピノザ的な意味で）欠如あるいは捻じれの位置としての主体の問題であろう。ドゥルーズはこの点を、「経験論」という彼のきわめて奇怪な用語によって考えようとしていたのではないか。ただしこの点について、シモンドンとドゥルーズの比較から何かを論じることはおそらく不可能だろう。なぜならシモンドンの記述のなかでは、この主体の欠如あるいは捻じれに相当するものが存在しないとみなされることでこそ、「スケール」と「階層性」が完全な線形性と整列性をもつという条件が成立可能なものとして描かれているからだ。たとえばこのことは、個体化の過程を記述するシモンドンの位置が記述それ自体の外部にしかないことによって示されている。[12]

ドゥルーズのシモンドンに対する批判、つまり「階層性」と「スケール」が線形性と整列性をもつという条件の排除は、主体の位置の捻じれがドゥルーズにとって極めて重要な問題であったことと結びついていると考えることができる。[13] というのも、内在から超越を作り出す（ドゥルーズによるフッサール現象学への評価）のでも、超越のうちに内在を位置づける（ドゥルーズによる新プラトン主義、とくにプロクロスへの評価）のでも（これらはいずれも「階層性」と「スケール」の線形性と整列性に結びつく）ないところにとどまることこそが、ドゥルーズにとっての内在性の問題だからである。ここにこそ、ドゥルーズがシモンドンとフッサールを併記することの背後に潜む意義があるのではないか。

12 たとえばこれに対して、カンギレムの「概念と生命」においてはこの捻じれ（概念を用いる私と、用いられる概念としての生命の捻じれ）が見られるし、同様のことをカヴァイエスの議論、とくにその「賭け」についての議論に見出すこともできる。

13 加えてシモンドンとホワイトヘッドを比較するラトゥールの立ち位置や、タルドとの対比も以上の文脈から理解することが可能であるだろう。ドゥルーズは、ホワイトヘッドを新プラトン主義の文脈に結び付けながらそれをあえて、「経験論」と呼ぶ。それに対してラトゥールは、ドゥルーズが重視する主体の違和感を平板にとらえ過ぎているように見える。また、そもそも「シミュラクル」の問題についてドゥルーズが参照を附しているのが、『分析手帳』で『ソピステス』を論じた精神分析家のグザヴィエ・オドゥアールであることとの関連も考える必要があろう。

14 ドゥルーズに関するものは引用したもの以外割愛した。プラトンの著作を含めて、本文中で題名を挙げたものも一部割愛した。

文献[14]

カヴァイエス，ジャン［２０１３］『構造と生成Ⅱ　学知の理論と論理学について』近藤和敬訳，月曜社．

カンギレム，ジョルジュ［１９９１］「概念と生命」『科学史・科学哲学研究』金森修監訳，法政大学出版局，３９０―４２８．

米虫正巳［２０１１］「個体化に立ち会うこと―シモンドンと「第一哲学」の（不）可能性について」『フランス哲学・思想研究』第16号，日仏哲学会，３―15．

橘真一［２０１２］「ジルベール・シモンドンにおけるinformationの概

念について：ベルクソン受容という背景から照らした考察を中心に」『年報人間科学』大阪大学人間科学研究科，99―113．
ドゥルーズ，ジル［1992］『差異と反復』財津理訳，河出書房新社．（旧版）
ドゥルーズ，ジル［1994］『千のプラトー』宇野邦一，小沢秋広，豊崎光一，宮林寛，守中高明訳，河出書房新社．
中村大介［2005］「技術のエピステモロジー――ジルベール・シモンドンの哲学の一側面」『フランス哲学・思想研究』第10号，日仏哲学会，196―208．
中村大介［2011］「シモンドンの技術論におけるイマージュと構想力」，『フランス哲学・思想研究』第16号，日仏哲学会，16―24．
廣川洋一［1997］『ソクラテス以前の哲学者たち』講談社．
藤澤令夫［2014］『プラトンの認識論とコスモロジー――人間の世界解釈を省みて』岩波書店．
ローラン，ステリン［2011］「シモンドンにおける存在の問いとしての個体発生」『Vol 05　特集＝エピステモロジー』以文社，128―139．

Cavaillès, Jean [1940] « Du collectif au pari », *Revue de métaphysique et de morale* 47 : 139-163. Réédition 1994.

DeLanda, Manuel [2000] *A Thousand Years of Nonlinear History*, Swerve Edition.

Lautman, Albert [1938] *Essai sur les notions de structure et d'existence en mathématiques*, Hermann. Réédition 2006.

Lautman Albert [1946] *Symétrie et dissymétrie en mathématiques et en physique. Le Problème du temps,* Hermann. Réédition 2006.

Lautman, Albert [2006] *Les mathématiques, les idées et le réel physique,* Librairie Philosophique J. Vrin.

Simondon, Gilbert [1964], *L'individu et sa genèse physico-biologique,* PUF.

Simondon, Gilbert [1969], *Du mode d'existence des objets techniques,* Aubier.

Simondon, Gilbert [1989], *L'individuation psychique et collective,* Aubier.

Simondon Gilbert [2005], *L'individuation à la lumière des notions de forme et d'information,* Éditions Jérôme Million.